

授与機関名 順天堂大学

学位記番号 乙第 2297 号

A Retrospective cohort study of Tinea Pedis and Tinea unguium in Inpatients in a Psychiatric Hospital

(精神神経科病院入院患者を対象とした足白癬、爪白癬の後ろ向きコホート調査)

河井 正晶 (かわい まさあき)

博士 (医学)

論文内容の要旨

足白癬・爪白癬は皮膚科の日常診療で最も頻度の高い皮膚真菌症で、JAPAN FOOT WEEK 2006 の報告によると日本人の約 5 人に 1 人が足白癬に、約 10 人に 1 人が爪白癬に罹患していると推定されている。健常人に比べ足のケアが適切に行えてない可能性のある精神神経科入院患者を対象に、足白癬・爪白癬の罹患率と臨床症状の調査を行った。

結果は、入院患者 317 人（統合失調症 152 人、うつ病 165 人）中、46.1%に足白癬を、23.7%に爪白癬を認め、足白癬と爪白癬の合併率は 48.6%であった。足白癬の臨床病型は趾間型と角質増殖型を合併しているものが最も多く、足白癬の臨床スコアは 5.9、爪白癬の SCIO(the Scoring Clinical Index for Onychomycosis)スコアは 15.8 であった。足白癬の原因菌種は *Trichophyton rubrum* が 68.4%を占め、*Trichophyton mentagrophytes* は 26.3%であった。男女間、統合失調症患者とうつ病患者の間に足白癬・爪白癬の罹患率に統計上有意の差は認められなかった。年齢で見るとうつ病では 50 歳代に足白癬・爪白癬のピークがあり、統合失調症では 50 歳代と 70 歳代の二峰性のピークを示した。慢性期の統合失調症患者では足白癬・爪白癬ともに重症化する傾向がみられた。精神疾患に罹患している患者は、その精神症状ゆえに自らの足のケアを適切に行えなかったり、無自覚、無関心であったりするために、足白癬・爪白癬に罹患しやすく、なおかつ重症化しやすいと考えられた。糖尿病や HIV 感染症などと同様に統合失調症やうつ病は足白癬、爪白癬の危険因子と捉えてよいと結論した。精神神経科入院患者を対象とした足白癬・爪白癬の調査報告は日本では初めてであり、世界的にも数例しかない。